

## 大自在

青空に映える茶の新芽がまぶしかった。10連休初日、磐田市最北端の山間地、大平で開かれた茶摘みと食事・コンサートを兼ねた交流会に誘われた。主催の鈴木正士さん(70)は旧豊岡村の元職員。自宅や茶園を開放して茶摘み、山菜狩りを楽しませ、その場で味わってもらおう趣向だ▼鈴木さんは豊岡村で主に産業振興を担当していた。2005年、村が磐田市と合併したのを機に退職。大平で農林業を営む。23年続けているこの催しに、地元のほか県外も含め今年は100人近くが参加し、山の幸と自然を堪能した▼「平成」がきょう幕を閉じる。この30年、地方が置かれた環境や自治体の姿は大きく変わった。「平成の大合併」(1999～2010年)で市町村は1727に半減、県内も豊岡村などがなくなり、74市町村が35市町となった▼基礎自治体の基盤確立が目的の大合併だったが、地方の財政難は厳しさを増す。高齢化と人口減少で、さらに半数が「消滅自治体」になるとの警鐘も現実味を帯びる。視点を地域に向ければ、消滅可能性の懸念は広がる。大平地区も例外でない▼人手をかけなければ自然の管理はできない。鈴木さんを支援しているのは、農水省OBらが提唱する「猫の手クラブ」。首都圏などから有志が自費で月1度訪れ、楽しみながら農地の管理や下刈り・間伐などの助っ人となる。交流会にも参加していた▼令和の時代にも地域を持続させていくには、こうした「猫の手」を借りたい。「猫の手というより神の手」。鈴木さんは感謝の気持ちを、こう発信している。

2019.4.30